

仙台市文化財調査報告書第47集

仙台平野の遺跡群Ⅱ

——昭和57年度発掘調査報告書——

1983年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第47集

仙台平野の遺跡群Ⅱ

—昭和57年度発掘調査報告書—

1983年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市内には、425ヶ所の周知の遺跡があります。今までの発掘調査により、5～6万年前の前期旧石器時代より、現在に至るまでの先人の生活の跡が確認されています。広瀬川、名取川七北田川が形成した平地や、青葉山段丘を始めとする西部の丘陵は、昔から我々に生活の糧を与えてきています。

その土地が、我々の手で大きく変えられようとしています。山を切りくずし、畑や水田であった所を掘削して、住宅や道路やビルを建設しています。これらの建設により我々の生活は便利になってきました。新しい幅の広い道路の両側には、木の香も新しい住居が立ち並び、各種の店舗がぎわいをみせています。

こういう中で、今年度、発掘届（通知）が260件ほど提出されており、その件数は年々増加しています。仙台市では、昭和56年度から国庫補助事業として「仙台平野の遺跡群」という調査部門を設け、遺跡内の小規模開発（個人住宅建築等）に対応してまいりました。今年度は、届出の中から3遺跡13件について詳細分布調査を目的とした発掘調査を実施し、ここに報告いたします。これらの調査、整理、報告書の作成にあたりまして、多くの方々の協力や助言を受けましたことを感謝申し上げます。

最後に、本書が多くの方々の目にふれることによって、文化財の保護、研究の一助となれば幸いです。

昭和58年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は国庫補助事業の緊急遺跡範囲確認事業に伴う、仙台平野の遺跡群の発掘調査報告書である。

2. 本書の作成にあたり、次のとおり分担した。

本文執筆……佐藤 隆・加藤正範・金森安孝

遺構実測製図……高橋勝也

遺物実測製図……篠原信彦・高橋勝也

遺構写真……佐藤 隆・加藤正範・金森安孝

遺物写真……木村浩二・高橋勝也

編集……佐藤 隆・加藤正範・金森安孝

3. 本書中、郡山遺跡の調査報告は概報とし、詳細については、仙台市文化財調査報告書「郡山遺跡Ⅲ—昭和57年度発掘調査概報」の中にまとめ、その遺構略号は次のとおりである。

S A 檻・材木列 S B 建物跡 S D 溝 跡

S I 積穴住居跡 S K 土 壤 S X その他

4. 本書中の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐原:1973年)を使用した。

5. 地形図は建設省国土地理院発行の5万分の1「仙台」を使用した。

6. 本調査は、昭和56年4月に着手し、昭和57年3月31日に全ての事業を終了した。

目 次

序 文

例 言

I. 調査計画と実績	1		
II. 発掘調査報告	3		
〔1〕 砂押古墳	3		
1. 造跡の位置と環境			
2. 調査経過			
3. 発見遺構			
4. 出土遺物			
5.まとめ			
〔2〕 史跡陸奥国分寺跡	11		
造跡の位置と環境			
F K B - L 区			
1. 調査経過			
2. 発見遺構			
3. 出土遺物			
4.まとめ			
F K B - M 区			
1. 調査経過			
2. 発見遺構			
3. 出土遺物			
4.まとめ			
〔3〕 郡山遺跡	19		
1. 造跡の位置と環境			
2. 調査概要			
(1) 第23次発掘調査	(2) 第25次発掘調査	(3) 第26次発掘調査	(4) 第27次発掘調査
(5) 第28次発掘調査	(6) 第29次発掘調査	(7) 第30次発掘調査	(8) 第31次発掘調査
(9) 第32次発掘調査	(10) 第33次発掘調査		

図 版

I 調査計画と実績

仙台市内には、周知の埋蔵文化財包蔵地として400ヶ所以上が登録されている。しかし、都市整備に伴う公共事業・宅地化等に伴う民間開発事業の増加現象の中で、発掘届出件数が年々急増してきているのが現状である。このため、仙台市内に分布する埋蔵文化財は近い将来、煙滅の危機に陥ることは容易に予想されることである。

私たちの祖先が残してくれた生活の足跡である文化財を、保護・活用し継承していくために仙台市では、昨年度から国の補助を得て仙台平野の遺跡群の発掘調査を実施することとし、下記のような実施計画を立てた。

1. 目的 仙台平野に分布する遺跡群にかかる個人の小規模な開発（個人住宅の建築等）に伴う発掘調査

2. 調査面積 1,000m²

3. 調査期間 昭和56年4月～昭和56年12月

4. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係



第1図 発掘調査遺跡位置図

(課長) 永野昌一 (上幹兼係長) 早坂春一

(教諭) 佐藤 隆 加藤正範 (主事) 金森安孝

同課文化財管理係

(係長) 大沢隆夫 (主事) 山口 宏 渡辺洋一

調査指導 郡山遺跡指導委員会 (会長 伊東信雄) 横崎彰一 (名古屋大学教授)

調査・整理参加者 赤井沢進 赤井沢千代子 安喰真由美 池田俊也 石川勝子

神成浩志 管野政彦 菊地宜之 小林 充 斎藤誠司 桜田逸子

佐藤清江 高橋りえ 藤本智彦 三浦秀樹 茂泉 満 谷津妙子

横山広美 神尾紀似子 渡辺紀雄 赤間郁子 神尾恵美子 佐藤智雄

長谷部祐二 佐藤一彦 高野志満子

本事業は今年度で二年目を迎えた。今年度は郡山遺跡内での発掘届出件数が多く、当遺跡内での調査は、同じく国庫補助事業として実施している郡山遺跡範囲確認調査と協力体制を組みながら進め、大きな成果を得た。

本調査は、日常の文化財保護行政指導と並行しながらの調査ではあったが、調査面積もほぼ予定通りであり、市内の遺跡の範囲確認・性格把握・詳細分布調査という点で大きな成果を得ることができた。

(加藤正範)

第1表 発掘調査実績表

調査 事項	砂押六塙 (C-007)	史跡鹿島御分寺跡(C-119)		郡山遺跡(C-104)			
		FKB-B-L区	FKB-B-M区	第23次発掘調査	第25次発掘調査	第26次発掘調査	第27次発掘調査
所在地	仙台市砂押町18	木ノ下一丁目10	木ノ下二丁目2-2	郡山六丁目3-6	郡山二丁目19-6	郡山二丁目9-12	青山一丁目17-2
申請者住所	仙台市 砂押町23-17	木ノ下二丁目10-18	木ノ下三丁目10-10	郡山六丁目3-6	郡山五丁目141-1	郡山二丁目3-11	郡山二丁目111-57
申請者氏名	佐藤 時 宏	久保田 亮 三	柴田 雄 男	浅野 勝 边	庄子 達 男	柴田 重 夫	寺 誠 テル子
開発内容	駐車場建設	共同住宅建築	共同住宅建築	住宅新築	住宅新築	店舗付共同住宅新築	住宅新築
対象面積	1,360m ²	112m ²	328m ²	288m ²	244m ²	95m ²	288m ²
調査面積	245m ²	48m ²	21m ²	13m ²	3m ²	6m ²	18m ²
調査期間	昭和57年 5月10日～7月28日	7月22日～8月11日	11月24日～12月2日	4月19日～4月20日	4月22日～4月23日	4月22日～4月27日	7月6日～7月15日

調査 事項	郡山遺跡(C-104)					
	第28次発掘調査	第29次発掘調査	第30次発掘調査	第31次発掘調査	第32次発掘調査	第33次発掘調査
所在地	仙台市 郡山六丁目22	郡山五丁目8-7	郡山三丁目14-12	郡山三丁目17-2	郡山四丁目13-4	郡山六丁目3-33
申請者住所	仙台市 田子一木121-2	八軒小路10	郡山二丁目12-21	御前殿町 人字小倉平山小字73	郡山四丁目13-4	郡山六丁目3-33
申請者氏名	貝々筑 光 雄	松谷 六 邦	岡 つや子	高 樹 庄五郎	中 村 記 康	
開発内容	住 宅 建 築	住 宅 建 築	住 宅 建 築	住 宅 建 築	住 宅 建 築	住 宅 建 築
対象面積	181m ²	226m ²	171m ²	543m ²	2,277m ²	443m ²
調査面積	27m ²	9m ²	36m ²	180m ²	9m ²	13m ²
調査期間	7月15日～7月21日	8月30日～9月1日	9月12日～10月9日	10月15日～12月10日	10月25日～10月27日	11月8日～11月16日

II 発掘調査報告

[1] 砂押古墳

1. 遺跡の位置と環境

砂押古墳は、仙台市砂押町18、仙台駅の南西4kmに所在し、仙台市の南部にある青葉山段丘の南東側斜面に位置している。この斜面の南側には、名取川によって形成された沖積地が、名取市まで広がっている。

周辺には遺跡が多く、山田上ノ台遺跡の発掘調査により、前期旧石器時代の文化層が確認され、下ノ内遺跡や山口遺跡では、縄文時代中期中葉（大木8b）の生活の面が確認されている。近年この付近の発掘調査が進んでおり、縄文時代以前の遺構等がよりはっきりしてくるものと思われる。

古墳についてみると、この砂押古墳を中心にして半径1km以内に確認されている古墳は、裏町（註1）、金洗沢、三神峯、二塚（註2）、一塚（註3）、金岡八幡、教塚の各古墳と富沢窓跡（註4）、があり、半径2km以内には、大野田1・2号（註5）、五反田（註6）、春日社、王の塚、鳥居塚、上野東、兜塚（註7）、の各古墳がある。この16の古墳の中で埴輪を伴うことが確認されているものが9古墳あり、それ以外の古墳についても出土する可能性がある。上記の古

1. 裏町古墳
2. 一塚古墳
3. 二塚古墳
4. 金岡八幡古墳
5. 砂押古墳
6. 三神峯古墳群
7. 金洗沢古墳
8. 嘉町古墳
9. 教塚古墳
10. 上野東古墳
11. 五反田古墳
12. 大野田1、2号墳
13. 春日社古墳
14. 王の塚古墳
15. 鳥居塚古墳
16. 富沢窓跡



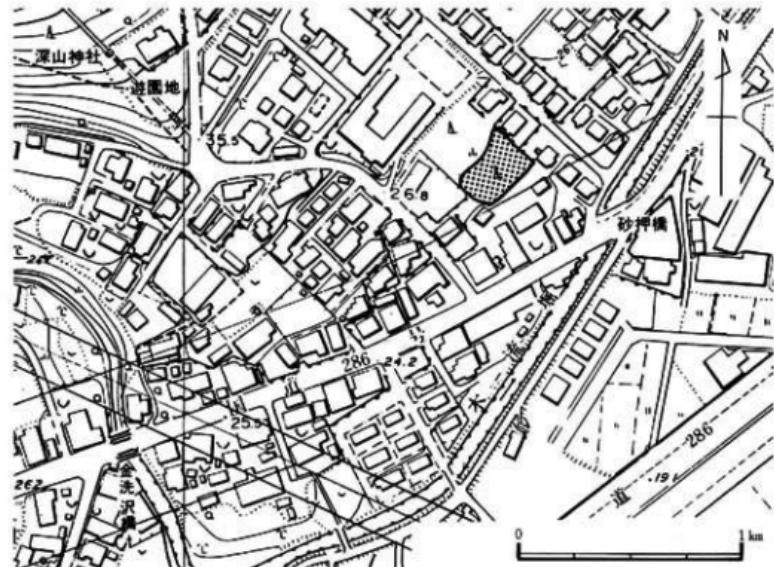
第2図 周辺遺跡位図

墳の中で、主体部をも含めた発掘調査が行われているのは、裏町古墳である。その結果、主軸長は40m以上、後円部の高さは基底部より約4.5mの前方後円墳で、主体部は河原石積の堅穴式石室であり、周溝、葺石、円筒埴輪、朝顔形埴輪をもつことがわかった。前述の裏町古墳出土の埴輪は、富沢窯跡より供給されたのではないかと考えられる。また、浜田廉氏『名取鎮所』(昭和4年)によると、この丘陵の裾には、もっと古墳が存在していたようである。それらは宅地化や耕作のために墳丘部分が消滅したと思われる。

沖積地である大野田付近においては、発掘調査の結果、墳丘部分が削平された五反田古墳、大野田1号墳・2号墳が確認されているので、今後、周囲の水田等の発掘調査により、さらに多くの古墳が発見される可能性がある。また、三神峯や愛宕山丘陵の斜面からは、土手内横穴群や愛宕山横穴群その他の横穴群が確認されている。

奈良時代、平安時代の造構等については、下ノ内浦遺跡、下ノ内浦跡、六反田遺跡で確認されている。この頃になると、名取川の左岸、右岸の沖積地の各所に既に住居をもうけ、稻作等に従事するようになっていた。中世になると富沢館や茂ヶ崎城が設けられた。

このように、仙台市の青葉山段丘と名取川にはさまれた地区では、数万年前より現在に至るまで、我々の生活の営みが遺跡を通して考えられる個所なのである。



第3図 発掘調査区位置図

2. 調査経過

昭和56年4月、所有者より古墳の南側の平坦な箇所を駐車場にするための発掘届が提出されたので、昭和57年の5月より周辺等の遺構確認調査を実施した。この古墳は、昭和20年前後に防空壕や東北電力のトランク置場のために、墳丘の一部が削られていた。そして、平坦な箇所では大豆等の耕作が行われ、墳丘上には小さな祠があったということである。

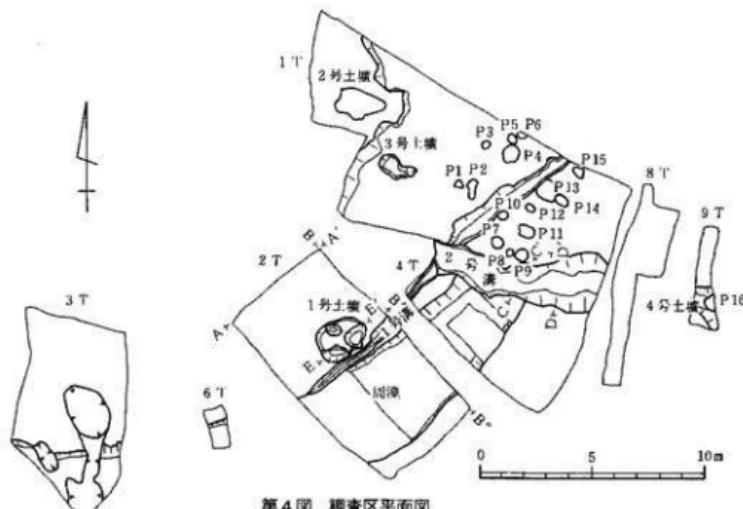
今回の調査では、調査箇所の北側に高さ約4m、直径約20mの墳丘が残存し円墳のような状況を呈していたので、墳丘より5mの幅のトレンチを3本、放射状に設定し、表面を重機でもって排除した。その結果、周辺は、2トレンチ、3トレンチにおいては検出したが、1トレンチにおいては検出されず、4・5・7・8・9トレンチを設定した。しかし、周辺は2号溝により破壊されており、調査区の東部では検出されなかった。3トレンチの西側に続くと思われる周辺については、今回の調査対象よりはずれる隣家の敷地内にあり、調査が不可能であった。

墳丘部分については、今回の工事で破壊される恐れはないので調査せず、主体部等の状況については、不明である。

3. 発見遺構

調査区内で発見された遺構は、周辺、溝2条、土壙4基、ピット17個である。

周辺 III層（地山）上面で検出され、墳丘の南から南東にかけて約45°の範囲内に弧状に延び、周辺の内縁部分の長さは約23mある。上端幅3.3~4.3m、下端幅2.3~3.9m、深さ30~40



第4図 調査区平面図

cmで、地山をゆるやかに掘り込み、底面には凹凸があり、堆積土は、粘土質シルトが多く、その1層中から、土師器环（ロクロ使用）や埴輪片を出土している。

1号溝 Ⅲ層上面で検出され2トレンチの西側より北東方向に延び、上端幅20~100cm、下端幅10~40cm、深さ10~20cm、堆積土は粘土質シルトで横断面はU字形である。土師器环（ロクロ使用）や埴輪片を出土している。

2号溝 Ⅲ層上面で検出され、4トレンチの北東部より東方向に延び総長7.5m以上、上端幅90~280cm、下端幅50~100cm、深さ40~70cmで横断面形はV字状である。土師器片、土師器腰片や埴輪片を多数出土している。周辺と1号溝を切っている。

1号土壤 2トレンチⅢ層上面で検出され長径2.2m、短径1.5m、深さ20~40cmで平面形は不整形で3個のピット状の凹地をもち、底面には凹凸がある。堆積土はシルトで土師器片と埴輪片を出土している。

2号土壤 1トレンチⅡc層上面で検出され、長径2.0m、短径1.2m、深さ30~40cmで検出面は西から東に傾いている。堆積土は、粘土質シルトであり、遺物は出土しない。

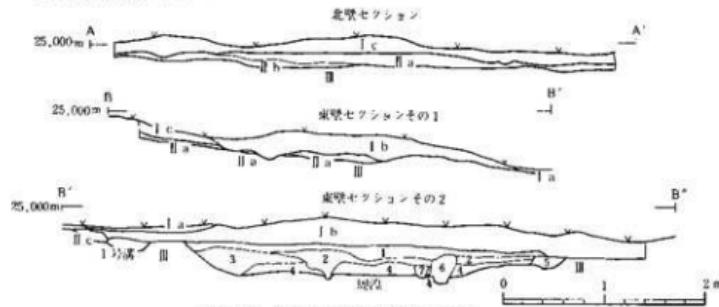
3号土壤 Ⅲ層上面1号トレンチで検出し、長径1.5m、短径1.0m、深さ20~30cm、断面は逆台形である。堆積土はシルトであり、遺物は出土しない。

4号土壤 9号トレンチⅢ層上面で検出されたが、溝であるかもしれない。全体は検出しなかったが、1.0×1.5m以上、深さ20cmである。堆積土は、粘土質シルトであり、16号ピットに切られている。遺物は出土しない。

ピットは、16個検出されたが、ピット16以外は、1号トレンチ内で検出された。

ピット2 平面形は歪んだ楕円形で、大きさは40×90cm、深さ15cm、土師器片と埴輪片を出

● 2号トレンチ	(断面部分)
I a 10YR 8/4褐色	粘土質シルト 堆積土
I b 10YR 8/4褐色	粘土質シルト 土師器片
I c 10YR 8/4ない青褐色	粘土質シルト
II a 10YR 8/4褐色	2.5YR 8/6と10YR 8/6を斑状に含む粘土質
II b 10YR 8/4褐色	シルト
III a 10YR 8/4ない青褐色	粘土質シルト
III b 2.5YR 8/6褐色	粘土質シルト 地盤
(1号)	
1 10YR 8/4ない青褐色 粘土質シルト	1 10YR 8/4ない青褐色 粘土質シルト
2 2.5YR 8/6褐色	2.5YR 8/6褐色
3 10YR 8/4ない青褐色	3 10YR 8/4ない青褐色
4 2.5YR 8/6褐色	4 2.5YR 8/6褐色
5 土師器片	5 土師器片
6 土師器腰片	6 土師器腰片
7 壁輪片	7 10YR 8/4褐色



第5図 2号トレンチセクション図

土する。

ピット4 平面形は円形で直径80cm、深さ20cmである。土師器壺片を出土する。

ピット9 平面形は、ほぼ円形で直径60cm、深さ20cmである。埴輪片と土師器壺の破片を出土する。

ピット10 平面形は、ほぼ円形で直径50cm、深さ10cmである。土師器片を出土する。

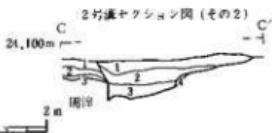
ピット11 平面形は、歪んだ楕円形で、大きさは50×70cm、深さ20cm、土師器壺の体部を出土する。

ピット14 平面形は、歪んだ楕円形で、大きさは40×60cm、深さ10cm、土師器片と埴輪片を出土する。

● 2号溝 D'-D																																																								
1 10YR 5/4 切削色	粘土質シルト	0.3~7mmのレキを含む	● 2号溝 E-E'																																																					
2 10YR 6/4 細砂	粘土質シルト	0.3~1mmのレキを含む	3 10YR 6/4 黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄、錆を含む	1 10YR 5/4 切削色	砂質シルト	炭、赤鐵を含む	4 10YR 6/4 黄褐色	粘土質シルト	0.3~1.5mmのレキを含む	2 10YR 5/4 切削色	シルト	縦(25×15)X10 ドウヒ	5 10YR 6/4 黄褐色	粘土質シルト	2mmのレキを含む	3 2.5YR 5/4 切削色	シルト	酸化鉄をマダリ状に含む	6 10YR 6/4 に少し黄褐色	粘土質シルト	0.3~1.5mmのレキを含む	4 2.5YR 5/4 切削色	シルト		7 10YR 5/4 白褐色	粘土質シルト		● 4号トレンチ C-C'	C'		8 10YR 6/4 黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む	1 10YR 5/4 切削色	粘土質シルト		9 10YR 6/4 に少し黄褐色	粘土質シルト	0.3~1.5mmのレキを含む	2 2.5YR 5/4 切削色	シルト		10 10YR 6/4 に少し黄褐色	粘土質シルト		3 2.5YR 5/4 切削色	粘土					4 10YR 5/4 切削色	粘土	
3 10YR 6/4 黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄、錆を含む	1 10YR 5/4 切削色	砂質シルト	炭、赤鐵を含む																																																			
4 10YR 6/4 黄褐色	粘土質シルト	0.3~1.5mmのレキを含む	2 10YR 5/4 切削色	シルト	縦(25×15)X10 ドウヒ																																																			
5 10YR 6/4 黄褐色	粘土質シルト	2mmのレキを含む	3 2.5YR 5/4 切削色	シルト	酸化鉄をマダリ状に含む																																																			
6 10YR 6/4 に少し黄褐色	粘土質シルト	0.3~1.5mmのレキを含む	4 2.5YR 5/4 切削色	シルト																																																				
7 10YR 5/4 白褐色	粘土質シルト		● 4号トレンチ C-C'	C'																																																				
8 10YR 6/4 黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む	1 10YR 5/4 切削色	粘土質シルト																																																				
9 10YR 6/4 に少し黄褐色	粘土質シルト	0.3~1.5mmのレキを含む	2 2.5YR 5/4 切削色	シルト																																																				
10 10YR 6/4 に少し黄褐色	粘土質シルト		3 2.5YR 5/4 切削色	粘土																																																				
			4 10YR 5/4 切削色	粘土																																																				



● 2号トレンチ・1号溝セクション図			
1 10YR 5/4 切削色	砂質シルト		
2 10YR 5/4 切削色	シルト		
3 2.5YR 5/4 切削色	シルト		
4 10YR 5/4 切削色	粘土質シルト		



第6図 土壌・溝セクション図

4. 出土遺物

(1) 土師器、破片資料が630点ある。

〈壺〉 4号トレンチの2号溝から、体部の $\frac{1}{2}$ の破片と壺片を出土した。体部は球形であり最大径は、体部中央からわずかに下にあり、約19cmであり、口頸部欠損のため全形は不明である。底部を焼成前に穿孔しており、その直径は約7cmである。内外面ともに器面が荒れており、器面調整は不明である。(図版11-1、第7図1)

〈甕〉

① 4号トレンチの2号溝から甕とともに、底部から体部にかけての破片を出土した。平底で、底部から体部にかけてやや内寄ぎみに立ちあがっている。調整は、外面は一部ハケメが認められる。内面には一部ヘラナデが認められる。底面はナデにより仕上げられ、直径7cmである。(図版11-2、第7図3)

② 2号溝2層中から、体部の破片を出土した。体部下半からゆるやかに立ちあがり体部中央

で直立し、体部上半で外反している。外面は、縦方向のハケメ調整で、内面は、一部にナデが認められる。最大径は体部下半にあり約17cmである。（図版11—2、第7図3）

（环） 4号トレンチ周辺、1層から出土している。平底で底部から体部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁部でゆるく外反する。底部外面には、回転糸切痕を残す。外面はロクロ調整で、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。（図版11—5、第7図5）

（鉢） 1トレンチ1層から、口縁部から体部にかけての破片を出土している。体部は、直立し口縁部は「く」の字状に外反する。調整は、外面の口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリ内面の口縁部はヨコナデ、体部はナデである。（図版11—4、第7図4）

（埴輪） 塩輪片は、調査区全体より出土し、出土遺物の58%を占める。円筒埴輪か朝顔形埴輪であり形象埴輪は全く見られなかった。口縁部片、体部片、底部片はそれぞれあるが、完形品とはならず、全形はわからない。色調から橙色と浅黄橙の二種に分類でき調整技法に基本的な差異はない。一部の破片には、朱（ベンガラ？）を塗布したものが認められる。口縁部と確認される破片は2点あり、それは、外反し、口唇部が中凹しており、内外面ともにヨコナデで推定径は30～32cmである。（図版11—6、7、第8図8、9）体部片には上幅8mm前後の△形の凸帯その下部には透孔があり、外面はハケメ調整でその上に凸帯を貼りつけてヨコナデを施している。（図版11—8、9、10、第8図10、11、13）底部と確認される破片は1点あり小破片ではあるが、接地面には、棒状の压痕がある。（第8図12）

（砥石） 1トレンチ1層から破片を出土している。長さ10cm、断面形は5角形であり、そのうちの3面が特に磨滅している。（図版11—11、第8図14）

5.まとめ

検出された周辺の内縁の弧の長さは23mある。これより推定すると周辺の内縁は、墳丘を中心に直径42mの円をえがくが、墳丘の北東の個所においては、周辺が2号溝に切られており、1号トレンチの調査においても周辺は検出されない。よって、この古墳の周辺は、墳丘の南東の個所で途切れるか、あるいは、東の方向に延びていくものが、2号溝等により削られていると考えられる。

1号溝は、ロクロ使用の土師器も出土しており、平安時代のものと考えられる。2号溝もロクロ使用の土師器を出土しているが、1号溝を切っていることより、1号溝よりさらに時代は新しくなると考えられる。1号土塙もロクロ使用の土師器を出土しているので、平安時代のものと考えられる。

出土した埴輪は完形品はないが、調整技法や器形から裏町古墳、大野田1、2号墳と宮沢窪跡出土のものと類似している。

墳丘の現状をみると、墳蓋線と墳丘の比高は約5.1mであり、推定墳蓋線の直径は約22mある。2トレンチで検出された積土の外辺より推定される墳丘の直径は約29mある。この規模は前述の裏町古墳や、すでに消滅しているが、近接している一塚古墳、二塚古墳と類似する。一塚古墳は円墳で、その径は24~35mで6世紀初めの造営、二塚古墳は、前方後円墳で主軸長約30m、後円部の高さ約4mである。

以上のことから、この砂押古墳は、周溝をもち、埴輪を伴ない、築造年代については、5世紀後半から6世紀前半ではなかろうかと考えられる。円墳か前方後円墳かということは、今回の遺構確認調査では判明しなかった。墳丘の北側と東側の個所、主体部の発掘調査が今後進めばこの古墳の形もよりはっきりしてくるであろう。

(佐藤 隆)

註1 仙台市教育委員会 第7集・仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書 昭和49年

註2 タ 仙台市史・3

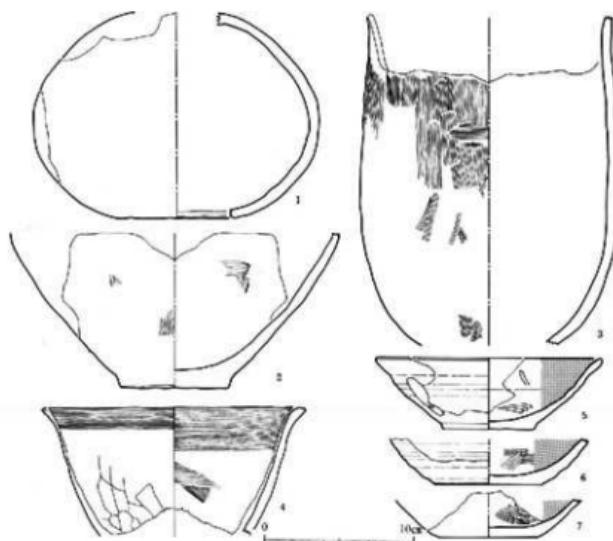
註3 タ 仙台市史・3

註4 古窯跡研究会 研究報告第3冊 富沢窯跡 昭和49年

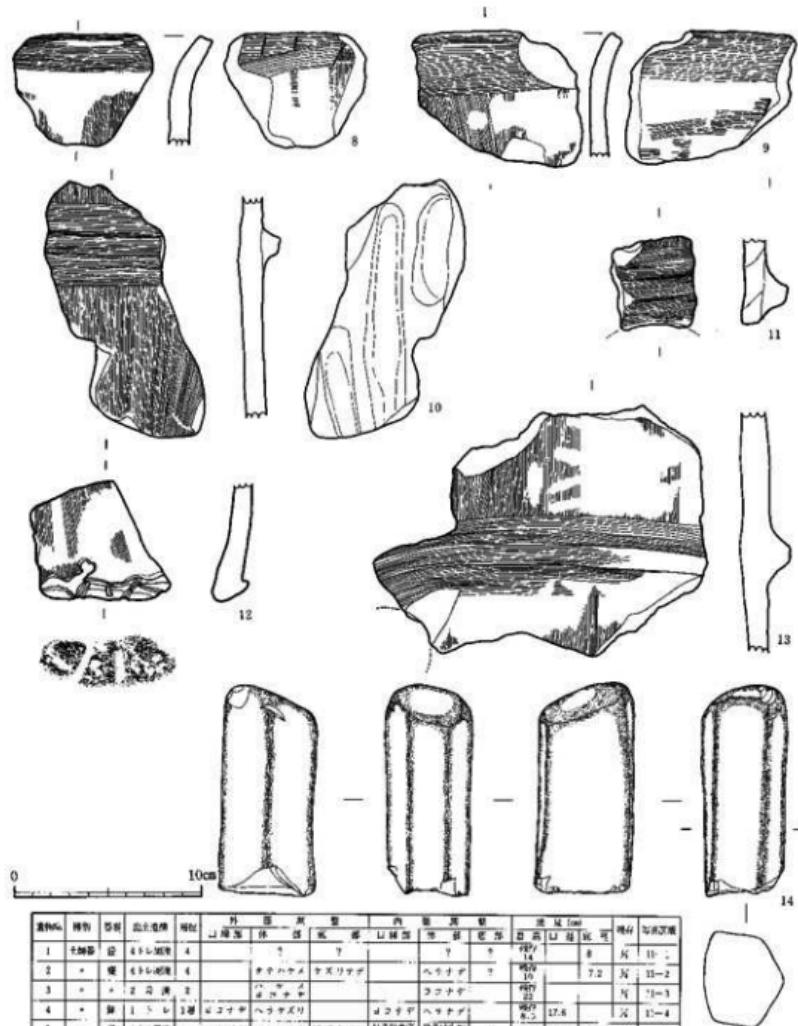
註5 仙台市教育委員会 第41集 年報3 昭和56年

註6 タ 第34集 六反田遺跡発掘調査報告書 昭和56年

註7 宮城県教育委員会 宮城県文化財発掘調査略報 第53集 昭和52年



第7図 遺物実測図



第8図 遺物実測図

遺物No.	種別	基部	出土位置	幅	外 周 長 度				内 容 方 量				周長 cm	高さ cm	厚さ cm	
					上端	下端	側面	底	側面	底	側面	底				
1	土器部	盆	4トントリ洞内	4	?	?	?	?	?	?	?	?	8.8	K	1.5-1	
2	+	甌	4トントリ洞内	4	モチハコテナサツリナギ	-	ヘリナギ	?	モチハコ	10	ヘリナギ	7.2	N	3.5-2		
3	+	2. 口 瓢	2	モチハコテナサツリナギ	-	ヘリナギ	?	モチハコ	10	ヘリナギ	7.2	N	3.5-3			
4	+	瓶	1. 5. レ	モチハコテナサツリナギ	-	モチハコテナサツリナギ	?	モチハコ	10.7	モチハコ	12.8	N	1.5-4			
5	+	棒	4トントリ洞内	4	モチハコテナサツリナギ	ロカセナギ	ロカセナギ	ロカセナギ	モチハコテナサツリナギ	?	モチハコテナサツリナギ	4.8	16.2	8.2	H	1.5-5
6	+	2. 3. レ	+	+	?	?	?	?	?	?	?	?	7.5	N	2.1	
7	+	2. 瓶	3	+	?	?	?	?	?	?	?	?	6.5	N	0.7	
8	瓶	円筒	2トントリ洞内	2	モチハコテナサツリナギ	ハクメ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	?	モチハコテナサツリナギ	11.6				
9	+	2. 口 瓢	2	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	?	モチハコテナサツリナギ	11.7				
10	+	2. 3トントリ洞内	1	モチハコテナサツリナギ	ハクメ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	?	モチハコテナサツリナギ	11.8				
11	+	2. 方 瓢	4	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	?	モチハコテナサツリナギ	11.9				
12	+	1. 口 瓢	1	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	?	モチハコテナサツリナギ	9.1				
13	+	4トントリ洞内	2	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	モチハコテナサツリナギ	?	モチハコテナサツリナギ	11.0				
14	石 基	板瓦	1. トントリ洞内	1	モチハコテナサツリナギ	10.1	10.0	0.8	N	2.2-2						

[2] 史跡陸奥国分寺跡

遺跡の位置と環境

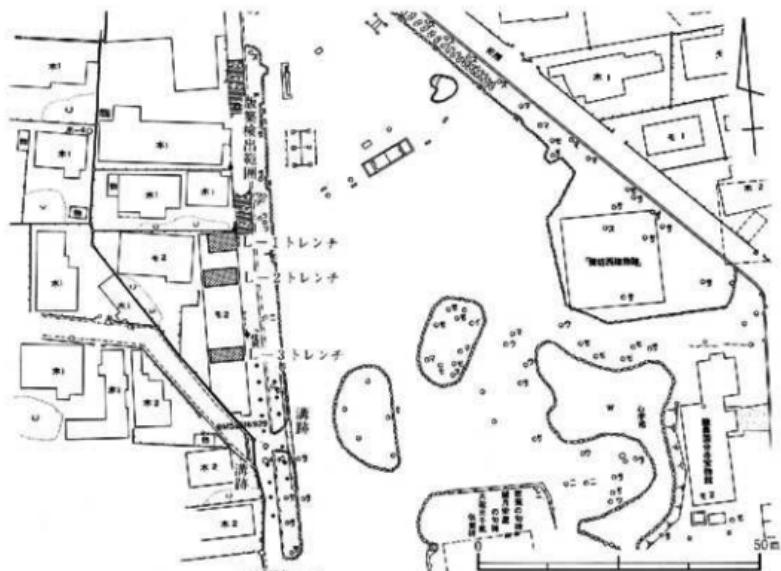
史跡陸奥国分寺跡は、仙台駅の東南約2.5km、国府多賀城から南へ10km離れた仙台市木ノ下にある。ここは広瀬川によって形成された河岸段丘最下段である下町段丘にあたり、標高は16~17mである。

周辺には南方に古墳時代中期の遠見塚古墳、後期の法領塚古墳、弥生時代以来の集落跡である南小泉遺跡がある。東方に仙台市東郊条里跡、西方には向山横穴群、北方の丘陵地帯には、陸奥国分寺・国府多賀城に瓦を供給した台ノ原・小田原古窯跡群が広がっている。また、周辺一帯は歌枕にも著名な「宮城野」の地であり、十数年前までは田畠が広く残っていたが、現在は仙台市東南部の市街地と化してきている。

F K B - L 区

1. 調査経過

史跡陸奥国分寺跡は、大正11年に国史跡指定を受け、昭和30年から数次にわたって調査が行われ、その成果に基づいた環境整備事業も計画的に実施されてきている。



第9図 調査区位置図

今回の調査は、昭和57年5月14日付けで仙台市木ノ下二丁目10-18久保田泰三氏より共同住宅を建築する旨の現状変更届が提出されたことによる。現状変更に該当する箇所は、史跡陸奥国分寺跡の西側寺域線（現在は木ノ下公園西側の市道）に隣接している。

西側寺域線の調査は、昭和34年に当时東北大学文学部教授の伊東信雄氏等によって行われ、^(註1)掘立柱列跡、溝跡、版築層が検出されている。これらに関連する遺構の存在が、現状変更箇所において十分考えられるため、遺構確認調査を実施することになった。

調査区名は、昭和55年度東門跡発掘調査区名（PKB-K区）を引き継ぎPKB-L区とし、調査区を3ヶ所に設定、北からL-1トレンチ、L-2トレンチ、L-3トレンチとした。

2. 発見遺構

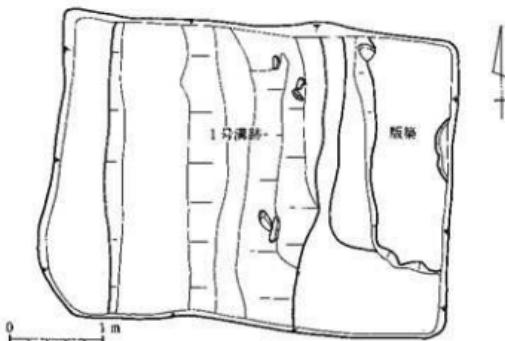
L-1トレンチ

版築 調査区の北東部で検出した。この版築は昭和34年の発掘調査、昭和54年の試掘調査で概に検出されているものである。過去の調査によれば、南北幅が約33mにわたることが確認されており、東西幅が不明であった。

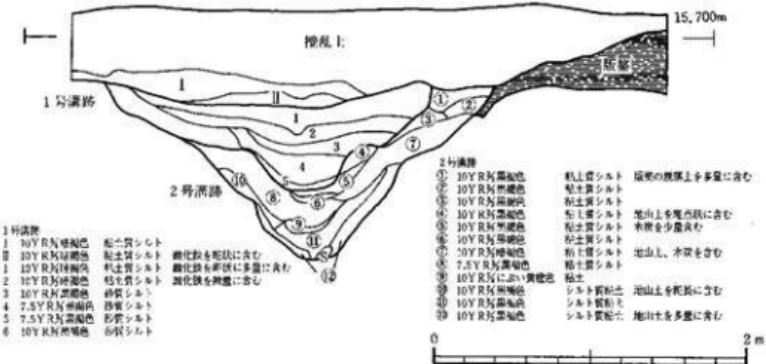
今回の調査では、南端を過去の調査の延長上で検出したが、西端は2号溝に切られていたため明らかにすることはできなかった。しかし、溝跡の西側にまで版築が伸びていないことから西端は2号溝跡内でおさまることが分かった。また、黒褐色シルトの版築基底層の上に版築されており、耕作による搅乱は受けているものの、残りの良い所で厚さ40cm程度が残存している。黄褐色粘土と黒褐色シルトが互層を成している。

1号溝跡 南北に延びる溝で、幅200-220cm、深さ50cm、横断面形は逆台形を呈し壁に段を持って立ち上がる。堆積土を大別すると2層に分けられる。1層は暗褐色粘土質シルト、2層黒褐色砂質シルトで、1層より均正唐草文軒平瓦、2層より丸瓦が出土している。版築を切っている。

2号溝跡 版築状況を検出すため、北壁に沿って深掘りしたところ、断面観察で1分溝によって切られる2号溝を検出した。幅210cm、深さ95cm、横断面形は緩やかなV字形を呈す。堆積土を大別すると4層に分けられる。1層は黒褐色粘土質シルト、2層暗褐色粘土質シルト、



第10図 L-1トレンチ平面図



第11図 L-1 トレンチ北壁セクション図

3層にぶい黄褐色粘土、4層黒褐色シルト質粘土である。遺物は出土しない。

L-2 トレンチ

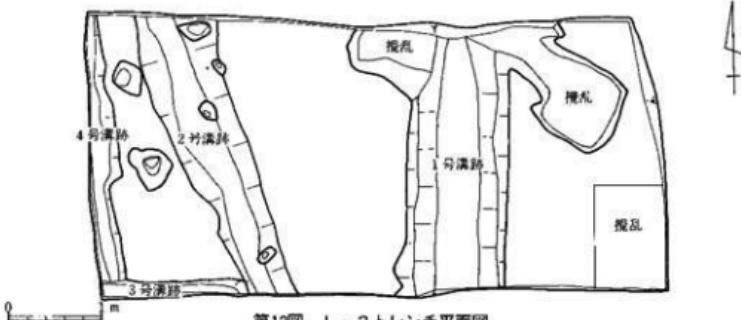
1号溝跡 幅110cm、深さ55cm、横断面形は緩いj字形を呈す。堆積土を大別すると3層に分けられる。1層は暗褐色砂質シルト、2層黒褐色粘土質シルト、3層黒褐色シルト質粘土である。北壁側は擾乱を受けしており、遺物は出土しない。

2号溝跡 幅25~45cm、深さ20cm、横断面形は逆台形を呈す。堆積土は、暗褐色シルト質粘土の単層である。3号溝を切っており、遺物は出土しない。

3号溝跡 南西コーナーで検出。幅20cm以上、深さ30cm以上で2号溝に切られているが、4号溝を切っている。遺物は出土しない。

4号溝跡 西壁に沿って検出。幅35cm以上、深さ10cm以上で3号溝に切られている。遺物は出土しない。

ピット 6個検出うち、4個は2号溝を切っている。遺物は出土せず、全体の組合せ、時



第12図 L-2 トレンチ平面図

期、性格は不明である。

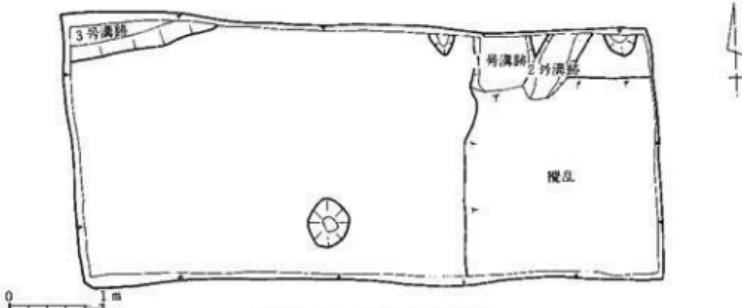
L-3 トレンチ

1号溝跡 幅約60cm、深さ20cm、横断面形は逆台形を呈す。南側^上以上は擾乱を受けており残存状況はよくない。2号溝に切られており、遺物は出土しない。

2号溝跡 幅40cm以上、深さ35cm、横断面形は逆台形を呈す。^上以上擾乱を受けており、残存状況はよくない。1号溝を切っており、遺物は出土しない。

3号溝跡 調査区北西コーナーで検出。幅40cm以上、深さ10cm以上である。遺物は出土しない。

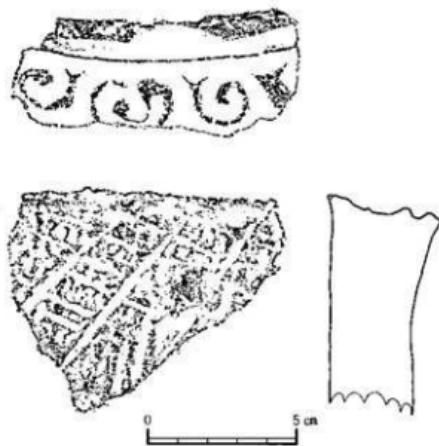
ピット 3個検出。遺物は出土しない。



第13図 L-3 トレンチ平面図

3. 出土遺物

出土した遺物は瓦のみである。I層中より平瓦の細片5点、L-1トレンチ1号溝跡より丸瓦・平瓦が1点ずつ出土している。このうち、L-1トレンチ1号溝跡堆積土1層中より出土している平瓦は、均正唐草文軒平瓦で一枚作りである。凸面に繩目叩き、凹面に布目痕が残っている。額は剝離しており、接合面に0.6～2cmの斜格子のヘラキズが入れてある。（第14図）



第14図 軒平瓦拓影

4.まとめ

昭和34年の国分寺発掘調査の際に、西側寺域線で検出された柱列跡をはさんで、南北に平行する溝跡が、柱列の東西から検出されている。東側を走る溝跡は柱列から約1.3m離れ、幅約1.3m、深さ約16cmで、西側を走る溝跡は柱列より約3m離れ、幅約80cm、深さ約50cmであった。

今回の調査で検出された、L-1・L-2・L-3 トレンチの1号溝跡は、柱列跡西側の溝跡延長線に一致し、方向を同じにすることから柱列跡西側溝跡と合致、柱列跡と関連する構造で、昭和55年度環境整備予備調査で検出された、東門直下の外開溝と対応関係にあると考えられる。^(註2)しかし、この溝跡が何の目的で作られたものか、どこまで延びるのかは明らかにすることはできなかった。今後の調査結果を待ちたい。

L-1 トレンチで検出した2号溝跡は、L-2 トレンチにまで延びていないことから、版築の南側を取り囲むように東へ延び、版築上の建造物と関連する溝跡である可能性がある。拂十回りの環境の都合上、調査区を拡張できなかったのが残念である。 (加藤正範)

註1 伊東信雄「陸奥国分寺跡」陸奥国分寺跡発掘調査委員会編 昭和36年

註2 仙台市教育委員会「史跡陸奥国分寺跡—昭和55年度環境整備予備調査概報—東門跡」

昭和56年

F K B—M区

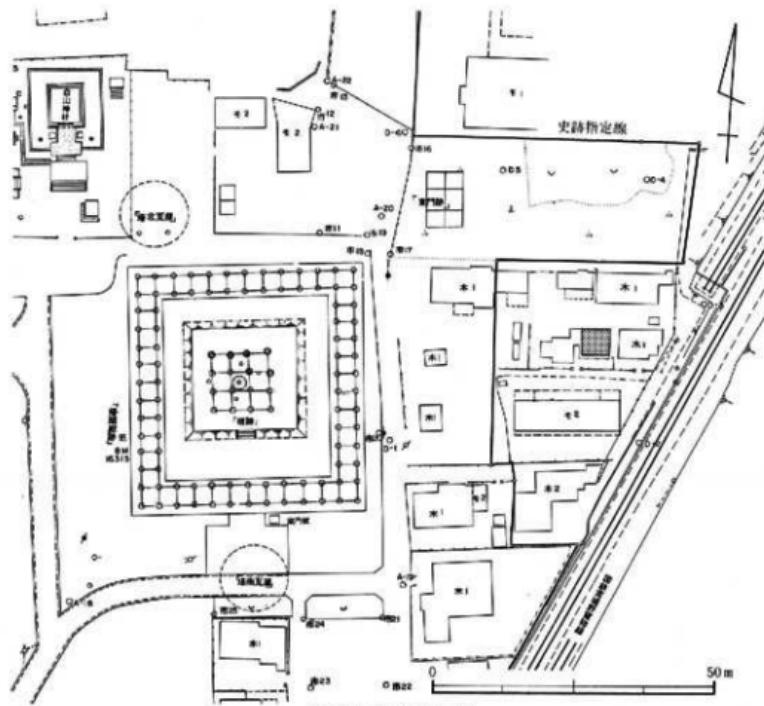
1. 調査経過

昭和57年2月1日付けで仙台市木ノ下三丁目10-10柴田勝男氏より、共同住宅を建築する旨発掘届が提出された。申請地は昭和55年度に造構確認調査が行われた、東門跡の南側に位置している。この時の調査では、東門基壇および南北に延びる築地、南北方向の外堀溝、東門基壇を切る掘立柱建物跡がそれぞれ検出されている。

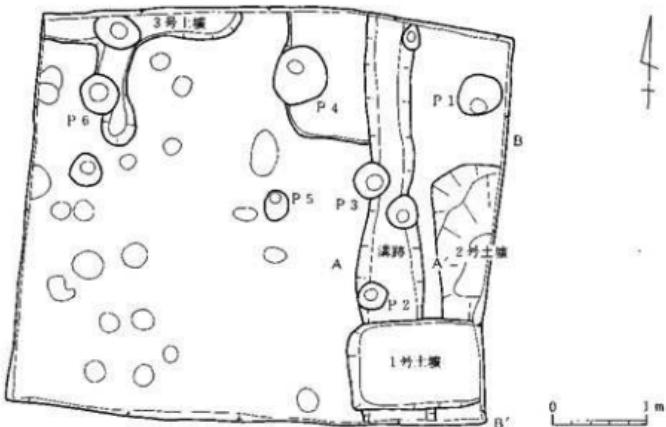
また、昭和56年度には、申請地と東門跡の間11m²を調査したが、擾乱土層から平箱2箱分の瓦を出土したのみで、古代の造構は検出されなかった。しかし、この付近は東門跡に関連する造構が存在する可能性があるため、調査を実施することになった。

2. 発見造構

発見した造構は、溝跡1条、土壙3基、ピット31個である。



第15図 調査区位置図



第16図 調査区平面図

溝跡 幅45~80cm、深さ10cm、横断面形は浅いじ字形を呈す。堆積土は2層に分けられ、1層が黒褐色シルト、2層暗褐色砂質シルトである。また、南北に延び2号土塙を切っているが1号土塙、ピット2・3・6・7に切られている。丸瓦、高台付環底部を出土する。

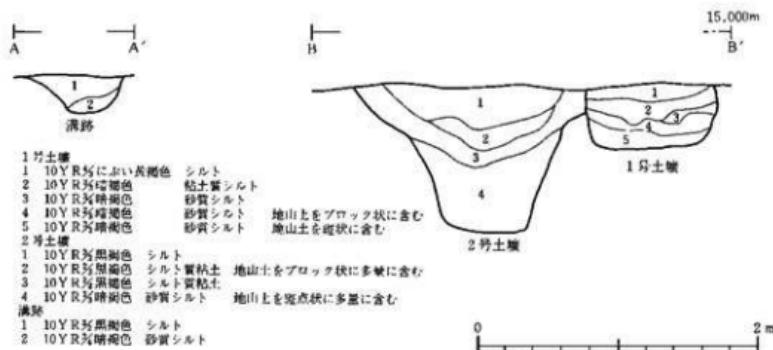
1号土塙 調査区南東コーナーで検出。大きさは45×70cm以上、深さ45cmを計り、断面は逆台形を呈する。堆積土は大別すると3層に分けられ、1層がにぶい黄褐色シルト、2層暗褐色粘土質シルト、3層暗褐色砂質シルトである。溝跡、3号土塙を切っている。丸瓦、平瓦、須恵器を出土する。

2号土塙 調査区の東壁で検出。大きさは70×170cm以上、深さ100cmを計る。横断面形は舟底形を呈す。堆積土は大別して3層に分けられ、1層が溝跡の堆積土と同じ黒褐色シルト、2層黒褐色シルト質粘土、3層暗褐色砂質シルトである。丸瓦、平瓦を出土する。

3号土塙 調査区北西コーナーで検出。大きさは140×210cm以上、深さ14cmを計り不定形を成す。ピット9・10に切られている。遺物は出土しない。

ピット 31個検出したが、柱痕を有するピットは1~6である。しかし、組合せ関係は不明である。遺物は出土しない。

- 〈ピット1〉 大きさは掘り方が45×50cm、柱痕跡が15×18cmを計る。溝跡を切っている。
- 〈ピット2〉 大きさは掘り方が30×35cm、柱痕跡が13×17cmを計る。溝跡を切っている。
- 〈ピット3〉 大きさは掘り方が40×40cm、柱痕跡が17×18cmを計る。溝跡を切っている。
- 〈ピット4〉 大きさは掘り方が55×65cm、柱痕跡が15×17cmを計る。
- 〈ピット5〉 大きさは掘り方が27×33cm、柱痕跡が12×15cmを計る。
- 〈ピット6〉 大きさは掘り方が35×35cm、柱痕跡が16×18cmを計る。



第17図 遺構セクション図

3. 出土遺物

出土遺物は、遺物収納用コンテナ1箱分で、須恵器、土師器の高台付壺の底部破片が1点ずつ出土しているほかは、すべて瓦の小破片である。土器は細片のため調整等は不明である。瓦は出土した中で、文様瓦が1点、ヘラ書き瓦が1点ある。

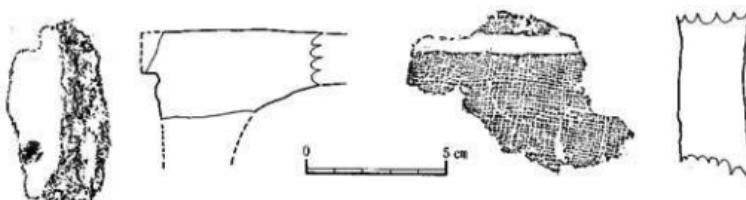
文様瓦は、溝跡堆積土の1層から出土している軒丸瓦で、外区に珠文が1個残存しているだけの小破片であり、宝相華文軒丸瓦か細弁連華文軒丸瓦と思われる。凸面は叩き目をヘラケズリで調整しており、丸瓦との接着面に削り痕が見られる。焼成は普通、色調は赤褐色で、胎土に小石、砂粒を含む。(第18図)

ヘラ書き瓦も、溝跡堆積土1層中より出土しているが、細片のため判読不能である。(第18図)

4. まとめ

今回の調査で発見されたピットの中から、柱痕跡を伴うものが6個検出されている。調査面積が狭いため、調査区内でのピットの組み合わせは明らかではないが、溝跡や土壠も検出されていることから、寺域の外側の東門付近に何らかの遺構が存在した可能性が強い。

(加藤正範)



第18図 出土瓦拓影

[3] 郡山遺跡

1. 遺跡の位置と環境

郡山遺跡は仙台市郡山二～六丁目に及び、西は東北本線から東は仙台バイパスまで、南は諏訪神社から北は八本松との境界付近まで、東西800m、南北900mの広がりが考えられる。この中で、推定方四町外郭線の官街ブロックは中央北寄りの一角を占めている。

遺跡の北側は広瀬川が形成した標高10～12mの自然堤防で、南につれて低くなり、標高6～8mの名取川の氾濫原へと移行する北高南低の土地である。

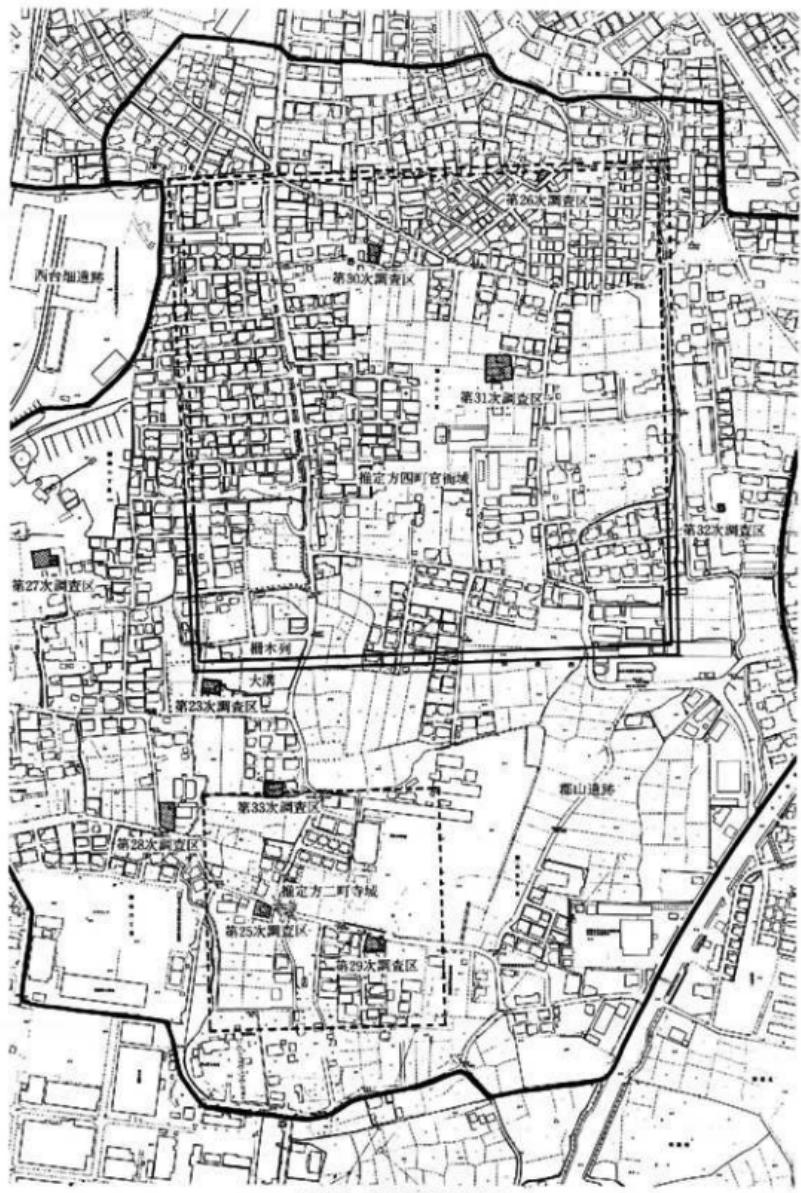
郡山遺跡周辺には、北西部に縄文・弥生土器を出土する西台畠遺跡、南方部に的場・庵ノ瀬遺跡、南東部に矢来・久ノ上・久ノ上Ⅱ・久ノ上Ⅲ遺跡がある。また東部には、15世紀に栗野大膳が居館とし、後に伊達政宗が居城とした北目城跡がある。さらに周辺には14世紀初めの古碑群が点在している。

これらのことから、この地域は先史時代から古代・中世・近世を経て現在まで連続と文化を受け継がれてきた地域であると言える。

2. 調査概要

郡山遺跡の発掘調査の詳細については、仙台市文化財調査報告書第46集「郡山遺跡Ⅲ—昭和57年度発掘調査概報—」に記述し、本報告書では概要にとどめることにした。

- (1) 第23次発掘調査 調査区は、推定方四町官街域の南西櫓の南東20mの地点で、第7次調査で検出されたS X56整地層の広がりが推定されていた所である。調査区内全域でS X56整地層の互層面を検出したが、堆積状況が均一で人為的な乱れが全く観察されず、官街に関わる全ての遺構に切られていることから、S X56は整地層ではなく自然堆積層であることが判明した。
- (2) 第25次発掘調査 調査区は、推定方二町寺域内に位置し第12次発掘調査区の西30mの地点にあたる。検出遺構はS K220土壙1基であり寺院に関する遺構は検出できなかった。
- (3) 第26次発掘調査 調査区は、推定方四町官街域の北辺にあたり外部大溝・櫛木列等の遺構の存在が予想された。調査の結果、S D221～S D223溝跡を検出したが、出土遺物から溝跡の年代を決定することができず、この溝が方四町官街域の北辺を区画する施設と断定することはできなかった。
- (4) 第27次発掘調査 調査区は推定方四町官街域の西120mの地点に位置する。調査の結果、溝跡1条、上壙2基、ピット28個を検出した。出土遺物にはピットから出土したE-1161面鏡があり、これは官街に関わる遺物と考えられ、方四町官街域の西方に官街と関わる施設が存在していたと考えることができる。



第19図 発掘調査区位置図

(5) 第28次発掘調査 調査区は、推定方二町寺域の西辺外に近接する地点で、第13次調査で検出されたS A103・104材木列の延長線上に位置する。調査の結果、S A272材木列を検出した。方向はE-28°-Sで、掘り方は上幅55~105cm、下幅10~25cm、深さ60~70cmの布掘りである。断面形は不整U字形で、南壁は直立ぎみに立ち上がり、北壁は緩い段をつけて立ち上がる。

今回検出したS A272材木列は、第13次調査で検出したS A103・104材木列の方向と同一方向であるが、いずれの材木列の延長に当たるかは断定し難い。しかし、13次調査の結果と合わせれば材木列は東西方向に約90m以上続いており、何らかの区画施設の一部であると考えられる。

(6) 第29次発掘調査 調査区は、推定方二町寺域内、第15次調査区の南50mの地点に位置する。調査の結果、土壙1基、ピット8個を検出したが、官街・寺院に関連する遺構は検出できなかった。

(7) 第30次発掘調査 調査区は官街域の北部で、ほぼ東西方向の既設道路の北側、第1次調査区の東側に位置する。調査の結果、竪穴住居跡3軒、溝跡1条、土壙8基、性格不明遺構1基が検出されたが、調査区が狭く、遺構の全形・規模が分かることは少ない。出土遺物には、弥生土器、土師器蓋・坏・高坏・甕、須恵器蓋・坏・平瓶・壺・甕・円面硯、半瓦、砾石、刀子鉄滓、ふいごの羽口等がある。

第1・19次調査の成果と今回の調査を考え合わせると、この地区は竪穴住居跡がまとまって検出されており、また出土遺物の状況から見れば、一般集落の竪穴住居跡とは考え難く、官街の造営に関わる人々か、あるいは官街の中で特定の役割を担っていた人々の住居跡と考えられる。

(8) 第31次発掘調査 調査区は、推定方四町のほぼ中央部に位置し、第2次調査区の北側・第24次調査D区の東側隣接地に当たる。調査の結果、据立柱建物跡3棟、溝跡2条、土壙9基、整地層を検出した。出土遺物には、土師器坏・高坏・甕、須恵器蓋・甕がある。

今回の調査では、第24次調査D区にまたがる、真北線から30°東に偏した建物跡を新たに1棟検出した。また、第2次調査区で北側に延びると考えられていた建物の規模が判明した。S B14建物跡は、北側桁列延長線上に柱穴が検出されなかったことから、第2次調査区と今回の調査区との間に建物の西妻が位置することが想定される。S B13・S B14・S B17・S B344建物跡は、全て真北線から30°偏した方向を基準にしている。またA区北半部では、S B344建物跡の柱を抜き取った後、東西方向に整地地業を行っている。さらに、S D324・S D364溝跡の2条は、他の全ての造構に切られており、出土遺物から古墳時代中期（南小泉式期）と推定され郡山遺跡内に古墳時代の遺構の存在が確認された。

(9) 第32次発掘調査 調査区は、推定方四町官街域の東方50mの地点である。当初、官街と関わる何らかの施設の存在が予想されたが、表土、旧水田耕作上の下層に灰色粘土質シルト、ス

クモ層が続き、遺構の検出はできなかった。

⑩ 第33次発掘調査 調査区は、推定方四町官衙域の南方に造営されたと考えられる、推定方二町の寺域北辺上に位置している。調査の結果、S D343溝跡を検出した。幅1.5~1.8m、深さ25~30cm、ほぼ真東西方向に延び横断面は緩いU字形を呈し、北壁はそのまま立ち上がるが、南壁は一度立ち上がった後50cm程の平坦面を形成し、さらに立ち上がる。またS D343溝跡は、方四町官衙域の外郭大溝（S D35）より南にちょうど一町（107m）離れた所に位置し、真東西線にほぼ一致している。しかし、調査地区も狭く小規模な溝跡であるため、寺域の区画施設に成り得るほかは、隣接地区の今後の調査成果に委ねたい。（佐藤 隆・加藤正範・金森安孝）

参考文献

仙台市文化財調査報告書第29集「郡山遺跡Ⅰ」 仙台市教育委員会 1981

タ 第38集「郡山遺跡Ⅱ」 タ 1982

タ 第42集「郡山遺跡」 タ 1982

宮城県多賀城跡調査研究所年報1971 一昭和49年度発掘調査概報一

宮城県教育委員会・宮城県多賀跡調査研究所

二本松文化財調査報告書第7集「郡山台Ⅴ」 福島県二本松市教育委員会

図版 1
砂押古墳
調査前風景



図版 2
砂押古墳
2号トレンチ完掘状況



図版 3
砂押古墳
2号トレンチ
北壁セクション
(1号溝、周辺)



図版4
砂押古墳
1号トレンチ完掘状況



図版5
砂押古墳
壺、甕出
土状況



図版6

FKB

L-1トレンチ

完掘状況



図版7

FKB

L-2トレンチ

完掘状況



図版8
FKB
L-1トレンチ
版 築

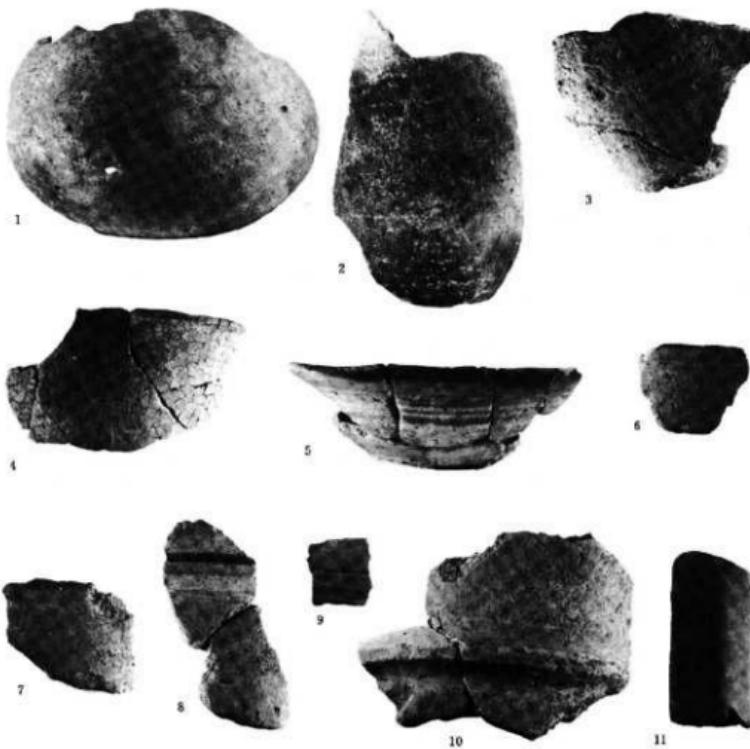


図版9
FKB
M区
完掘状况



図版10
FKB
M区
1号土壤





1~11. 砂押古墳出土遺物

1. 土師器蓋

2~3. 土師器變

4. 土師器杯

5. 土師器環

6~7. 軸輪口緣部

8~10. 軸輪體部

11. 磚石

12~14. 史跡陸奧國分寺跡出土遺物

12. FKB-L区 幹平瓦

13. FKB-M区 幹丸瓦

14. 幹瓦

圖版11 出土遺物

職 員 錄

仙台市文化財調査報告書刊行目録

社会教育課

課長 永野昌一
主幹 早坂春一

文化財管理係

係長 大沢隆夫
主任 山口宏
* 渡辺洋一

文化財調査係

係長(兼) 早坂春一

教諭 佐藤隆
渡辺忠彦
佐藤裕
加藤正範

主任 田中慎和
結城慎一

成瀬茂
青沼一民
教諭 柳沢みどり

木村浩二
福原信彦
佐藤洋津

金森安孝
佐藤甲一
吉岡恭平

渡部弘美
主浜光朗
斎野裕彦
長島栄一

荒井格
派遺職員 高橋勝也
嘱託鈴木大

- 第1集 天然記念物廻下セコイア化石林調査報告書 (昭和39年4月)
 第2集 仙台城 (昭和42年3月)
 第3集 仙台市燕氷菴寺等精穴古墳群調査報告書 (昭和43年3月)
 第4集 史跡除奥園分尼寺跡環境整備並びに調査報告書 (昭和44年3月)
 第5集 仙台市南小泉法師塚古墳調査報告書 (昭和47年8月)
 第6集 仙台市荒巻丘本松窯跡発掘調査報告書 (昭和48年10月)
 第7集 仙台市富貴裏町古墳発掘調査報告書 (昭和49年3月)
 第8集 仙台市向山愛宕山横穴六群発掘調査報告書 (昭和49年5月)
 第9集 仙台市根岸町寺横穴六群発掘調査報告書 (昭和51年3月)
 第10集 仙台市田中町安東追跡発掘調査概報 (昭和51年3月)
 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備子細調査概報 (昭和51年3月)
 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報 (昭和52年3月)
 第13集 南小泉遺跡一範囲確認調査報告書 (昭和53年3月)
 第14集 葉造跡発掘調査報告書 (昭和54年3月)
 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備子細調査概報 (昭和54年3月)
 第16集 六反田遺跡発掘調査 (第2・3次) のあらまし (昭和54年3月)
 第17集 北原敷遺跡 (昭和54年3月)
 第18集 桥江遺跡発掘調査報告書 (昭和55年3月)
 第19集 仙台市地下鉄開通分布調査報告書 (昭和55年3月)
 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報 (昭和55年3月)
 第21集 仙台市南発関係追跡調査報告1 (昭和55年3月)
 第22集 継ケ半 (昭和55年3月)
 第23集 年報1 (昭和55年3月)
 第24集 今泉城跡発掘調査報告書 (昭和55年8月)
 第25集 三神峯跡発掘調査報告書 (昭和55年12月)
 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報 (昭和56年3月)
 第27集 史跡除奥園分尼寺跡昭和55年度発掘調査概報 (昭和56年3月)
 第28集 年報2 (昭和56年3月)
 第29集 郡山遺跡I - 昭和55年度発掘調査概報I (昭和56年3月)
 第30集 山川上ノ台遺跡発掘調査概報 (昭和56年3月)
 第31集 仙台市南発関係追跡調査報告II (昭和56年3月)
 第32集 湊ノ米遺跡発掘調査報告書 (昭和56年3月)
 第33集 山川上台遺跡発掘調査報告書 (昭和56年3月)
 第34集 六反田遺跡発掘調査報告書 (昭和56年3月)
 第35集 南小泉遺跡郡山計画街路設工事開係第1次調査報告 (昭和57年3月)
 第36集 北前遺跡発掘調査報告書 (昭和57年3月)
 第37集 仙台平野の遺跡群I - 昭和57年度発掘調査報告書I (昭和57年3月)
 第38集 郡山遺跡II - 昭和57年度発掘調査概報I (昭和57年3月)
 第39集 燕沢遺跡発掘調査報告書 (昭和57年3月)
 第40集 仙台市高連跡道開係追跡調査概報I (昭和57年3月)
 第41集 年報3 (昭和57年3月)
 第42集 郡山遺跡I - 七地造成に伴う緊急発掘調査I (昭和57年3月)
 第43集 葉造跡 (昭和57年8月)
 第44集 湊ノ米遺跡発掘調査報告書 (昭和57年12月)
 第45集 広庭一茂庭住宅团地造成工事地内遺跡発掘調査報告書 (昭和58年3月)
 第46集 郡山遺跡III - 昭和57年度発掘調査概報I (昭和58年3月)
 第47集 仙台平野の遺跡群II - 昭和57年度発掘調査報告書I (昭和58年3月)

仙台市文化財調査報告書第47集

昭和 57 年 度

仙台平野の遺跡群Ⅱ

昭和 58 年 3 月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市国分町 3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 (株) 東 北 プ リ ン ト

仙台市立町24-24 TEL 63-1166

